

本論文執筆の目的は、ウィリアム・ゴールディング (William Golding) の作品を悪の視点から読み解こうとするものである。ここで善・悪を考察する際に、筆者が拠りどころとする二つの規範について述べておきたい。

第一に、アウグスチヌスの言葉「意志がより高いものを見捨て、より低いものに向きを変えるとき、意志は悪になる―意志が向きを変えて見ているものが悪だからではなく、向きを変えること自体が倒錯だからである」である。もう一つの規範は、これはエーリッヒ・フロムからの引用であるが、「人間の本质とか本性とかは、善とか悪のように特定の《実体 substance》ではなくて、人間存在の条件そのものに根ざす《矛盾 contradiction》である」である。

人間の本质が善でも悪でもなく、新しい解決を要求する矛盾にあるとすれば、人間はそれが消極的であれ積極的であれ何等かの解決を提示しなければならない。その際の意志の方向が悪とそうではないものとを分けるのである。また悪は極めて人間的な現象であることも確認しておきたい。

筆者はこのような観点から、ウィリアム・ゴールディングの作品に表現されている悪を検討してみようと考えた。

本論文は三部から成る。第一部では『蠅の王 (Lord of the Flies)』、『後継者たち (The Inheritors)』、『ピンチャー・マーティン (Pincher Martin)』、『自由落下 (Free Fall)』の四作品を論ずる。これらの作品では悪の問題が比較的単線的に、直截に扱われている。

第二部では『尖塔 (The Spire)』、『ピラミッド (The Pyramid)』、『可視の闇 (Darkness Visible)』の三作品を論ずる。これらの作品では重層的、複合的に悪の問題が扱われるようになっている。

第三部では『通過儀礼 (Rites of Passage)』と『この世の果てまで (To the End of the Earth: A Sea Trilogy)』を論ずる。『この世の果てまで』は晩年の海洋三部作、『通過儀礼』、『接近戦 (Close Quarters)』、『この世の炎 (Fire Down Below)』を合本したものである。これらの作品においては、悪の問題は背景に潜んで目立たなくなっているが、やはり厳として存在している。

第一部、第一章の『蠅の王』がゴールディングの第二次世界大戦の直接体験から出ていることは明らかである。さらに付け加えれば、グラマー・スクールでの教職経験であろう。

核戦争を避けるために英国の少年たちは輸送機に乗って太平洋に向かうのだが、敵機の攻撃にあつて南方の孤島に不時着する。物語はこの子供たちの一団がどのように振る舞うかを丹念にたどっている。一見楽園を想起させる子供たちが居住する孤島の反対側には、大洋の荒波が轟き、子供たちが拠って立つ場所がいかに危ういものであるかを示唆する。この海はリバイアサンと表され、棒に突き刺し地面に立てられた豚の首とともに少年たちの内に潜む悪の表象となる。

聖歌隊がハンター・グループに姿を変え、顔を迷彩色で塗るようになるにつれて、文明の抑制というたがが少しずつ外れていく。ほんの「遊び」のつもりが、次第に本物の「人狩り（殺人）」へと逸脱していくのである。

今にも凄惨な結末をむかえようとしているその時に、まるで「機械仕掛けの神」のように、イギリスの海軍士官（大人）が現われて事態は急転直下解決する。しかし、海軍士官もハンターに変わった少年達と何ら違わないということを忘れてはならない。彼らもまた、さきほどまで子供たちがやっていたことを、より大規模にかつ徹底して行っているのだ。しかも、彼ら自身そのことを知ることがないという苦いアイロニーが含まれる。

第二章『後継者たち』においては、ネアンデルタール人の黄金の黄昏と滅亡、人類の台頭が、一人の原人の意識を通して描かれている。言語未発達なネアンデルタール人の意識をいかに文章に定着させるか、これはゴールドディングの特に注意を払ったものの一つであった。

我々は論理的思考以前の状態にとどまっていたであろう旧人類の感覚知覚になじみながら、彼らの経験を解釈・分析すると同時に、彼らの無垢がいかなる性質のものであるかを知り、また我々の祖先であるホモ・サピエンスの本質も覗き見ることになる。終章で一人の人間が、後にしてきた暗い森での恐怖の体験（ネアンデルタール人との邂逅）を回想するが、これは冒頭のエピグラフへの痛烈なアイロニーになっている。

第三章『ピンチャー・マーティン』においては人間一般ではなく、一個人の墮落に焦点が絞られた。ゴールドディングは主人公ピンチャー・マーティンの悪のあり様を徹底して描いている。最終部で明かされるどんでん返しのような事実は衝撃的である。この小説の冒頭部で主人公は死に、あとは彼の煉獄での苦闘であるとされるのである。

この苦闘と並行して、作品に断片的に挿入され描き込まれているのが、snapshot あるいは trailers of old films と称される、いわゆるフラッシュバックの手法である。我々読者はこれらの断片的な映像をたよりに主人公の過去を覗き込み、それらを一つ一つ拾い集めて、ピンチャー・マーティンという男の過去にまとめあげなければならない。

そこで浮かび上がった彼の人生に対する構え、また人物像は何のためにあるかと言えば、それらによって主人公を判断するためにある。彼は自分のエゴの消滅を断固拒否し、天に向かって罵る人間である。自分自身で世界を創造してしまう人間である。しかし、その英雄的とも思われる断固たる拒絶の姿勢に対して、彼の創造する世界は何と貧相で惨めな世界であろうか。この小説の眼目はむしろそれを暴露することにある。そして、そのようなピンチャー・マーティンにどのような判断を下すかは読者に委ねられている。

『ピンチャー・マーティン』がピンチャーの Being、つまり主人公の悪の状態を描いているのに対し、第四章『自由落下』はサミュエル・マウントジョイの Becoming つまり主人公が何時、何処で、どのような理由から、どのようにして自分の自由な意志を行使し、逆に悪に囚われ自由を失ったかを求める過程を記したものである。

サミイは何を犠牲にしてもピアトリスを我が物にしたいと決意した。彼はその時、悪への自由を行使し、以後の「自由な転落」の道を辿ったのである。サミイの「自由な転落」

を支えたのは彼の倫理相対主義であった。これはニック・シェイルズの合理的世界観から引き出されたものである。相対的倫理は、彼をつき動かしているあらゆる残酷さや動物的欲情を合理化できるようにした。それは自己を満足させる行為を、次第に習慣的な日常行為にまで押し広めることを許した。ピアトリスを奪い、捨てることを許した。なんといても、心すべきはこのエゴという君主の平和と快樂だけなのであった。

さらに、戦争に伴う破壊を彼はむしろ歓迎した。人の心にも、世界全体にも無秩序があった。破壊や恐怖や死をこの世の型として受けとめれば、一人の人間の行為などは取るに足らない病気のようなものに過ぎなかったのである。

自分のこのような悪に囚われている姿を認識できるようになったのは、ドイツ軍の捕虜収容所におけるハルデ博士の訊問によってであった。回心を経験したサミイが悟った世界の核心を成す実体は、実は政治や科学によって用無しにされ、すでに冗談になっていたもの、「個々の人間の個々の人間に対する関係」であった。

彼は自分の「因果律による生の無責任さ」の結果をまざまざと見せつけられることになる。それは精神病院に収容されている、気の狂ったピアトリスの無惨な姿であった。

『自由落下』はゴールディングが作品の中で悪の問題を取り扱うその扱い方において、転回点となる作品である。ここでは自由と悪という問題のほかに、それと関連づけて「宗教」や「科学（テクノロジー）」が問題になっている。この作品以降、前の三作のように、悪が単独で扱われることはなくなり、常に他の何かとの複合という形態を取るようになる。悪がそれだけ多岐にわたって見分け難く浸透しているとも言えるのである。

第二部、第五章『尖塔』においては、「この世に無垢な仕事は在り得るのか」という疑問に対して一つの解答を提示している。ゴールディングは、歴史の中のある挿話—ジョスリンという名の助祭が、自分の信仰心を形として現わすため、狂気とも思われる宗教的情熱を傾けて、自分の生命をも顧みず、さまざまな障害や苦難と戦い、奇跡としか表現しようのない大尖塔を建立したという物語—を捉え、その「宗教的情熱」の内実を探り、暴いてみせた。

ジョスリンを支えたものは、「神我を選びたもうた」、この一言に尽きる。「私は尖塔を建立するために選ばれた者である」。彼の天真爛漫な愚直さは、彼の無知からきている。この無知はまた無垢に通ずる。人はこの企てに賛同し、肩を貸すべきである、と彼は信ずる。

しかし、問題は彼が宗教的情熱に溺れて、自分がいかなる人間であるかを忘れてしまうことにある。自分の無知を忘れ、自分の傲慢を忘れるのである。このひたむきさは、しかし、諸刃の刃の様相を帯びる。旧約聖書に登場する四人、ノアもヨブもホセアもアブラハムも、すべてはひたむきに信じ、行なった者達ではなかっただろうか。

このような二律背反的構造はこの作品の基調である。「尖塔は上に伸びるのと同じくらいに、下にも伸びてゆく」ものであった。ジョスリンの「尖塔」が空に伸びてゆくということは、彼の「地下の穴蔵」もまたその領域を広め、深めていくということなのだ。パンガル、グッディ、ロジャー、レイチェルはいわばその尖塔建設の犠牲になったのである。

尖塔が完成間近になったとき、彼は叔母のアリスンに会った。彼の尖塔建設のために資

金を提供したのは彼女であるが、それは大祭壇の脇に自分の墓所を確保する下心があつてのことである。あなたの体はこの教会を汚す、という彼の傍若無人な言葉に叔母は立腹し、意外な事実を明かすのである。国王に身を売った忌わしい叔母のおかげで息子が昇進できたことを。パンガルもグッディも、さらにロジャーもレイチェルも、そのままであれば、生きることに意味を持たせ得ていたかもしれない。ジョスリンの「宗教的情熱」が、これらすべてを犠牲にして尖塔を建立させたのである。彼は絶望に打ちひしがれる。

ジョスリンの尖塔は焦がれた女性に対して勃起した男根として見える。彼が識閥の下に保っていたグッディに対する欲望の代償作用、a self-erection for self-fulfillmentこれがすべてなのであった。しかし、尖塔はやはり美しいものとしても映るのである。それは依然として、グッディへの愛も含めた、愛の表現でもある。それを感じとった瞬間、彼の絶望は覆される。尖塔の呼び起こした絶望のビジョンも、また歓喜のビジョンも、いずれも十分真実を表わしていない。それは、物事に性急な判断を下さず、どちらつかずの状態で耐える、ということのもう一つの実例になるであろう。

この小説の最後で、神父はジョスリンのいまわの際の唇の震えを 'God! God! God!' と解して、死者の舌に聖体を置く。これによって、ジョスリンの信仰の物語は歴史の中に組み入れられるとともに、はしなくも信仰の偉大さという美名に塗り込められることになったのであった。

第六章の『ピラミッド』は三つのエピソードがゆるやかに繋がって成っている。ゴールディングはそれをソナタ形式に例えた。つまり、主題提示部があり、その主題に沿った幕間狂言風の展開部があり、その主題の再現と終結部があるというわけである。織りなされる第一主題は社会階級(あるいは舞台となる社会のイデオロギー)、第二主題は歪んだ人間性から生ずる歪められた愛ということになるろう。

舞台は英国の田舎町 Stilbourne に設定され、小説の中を流れる時間は 1920 年代から、第二次世界大戦を経て、1960 年代に到るまでである。この作品は一見して教養小説と目されかねないが、よく見ると似て非なるものであることが分かるだろう。それならば、これは 30 年代から 60 年代にかけての地方生活を描いた風俗小説なのであろうか。それもまた否である。むしろ、それらの描写を通じて浮かび上がってくる「経験とは何か」、「生きるということとはどのようなことか」等の実感が問題になる。

第七章『可視の闇』も三部からなる。第一部 MATTY においては、個々のエピソードは鮮明に記されているにもかかわらず、マティその人の一貫した人格は希薄である。マティは空襲の劫火から救い出されたというよりも、むしろそこから生まれ出てきたかのように描写されている。畢竟、彼を寓意的な人物と取らざるを得なくなる。マティの寓意性、抽象性の故にさまざまな意味が重層的に重ねられる。

第二部 SOPHY においては、双子の姉妹ソフィーとトニーの悪への指向と傾斜が、背景となる状況とともに、詳細に描写されている。その悪への動きはエントロピー(熱力学第二法則)と同様に虚無(エネルギー・ゼロ)へ向かうがごとくである。

第三部 ONE IS ONE においては、マティと双子姉妹、特にソフィーがテロリズム(子供誘拐)

をめぐって交差するのだが、それをグッドチャイルドはどう見るのかという問題になる。ゴールドディングは最極端の人間としての存在を描いた。それらがマティであり、ソフィーである。マティは精神性の極北、ソフィーは悪の極北である。いずれも読者には理解しがたい存在であるが、凡人であるグッドチャイルド(インテリではあるのだが)やエドウィンの理解を通してそれらの存在を理解する手がかりを得ることができる。

最終部で、マティが美しく輝く少年になってペディグリーを迎えに来るという印象的なシーンがあるが、そこに地獄の劫火に満ちたこの世界に「枯れた骨が生き返る幻」を幻視し、ここに「息吹」を吹き込もうとする作者の意志を感ずる。

第三部、第八章『通過儀礼』はイギリス青年の英国本土からオーストラリアへの航海記という形をとった小説である。この間に船に乗り合わせた牧師の死の顛末を描いている。

エドモンド・トールボットという野心に満ちた若者は、そのパトロンである名付け親の貴族某の推輓によってかの地の総督付秘書官という役職を得て赴任する途上である。私たち読者は彼を通してこの航海(1812年頃)を経験する、いわゆるトールボット体験を味わうことになる。貴族某の言葉「おまえを通して再び人生を生きたい」は私たち読者の言葉でもある。

また、彼がガンマ(Γ)の章に挿入した、牧師コリーの妹に宛てた手紙を読むことで、私たち読者は所謂コリー体験をすることにもなる。さらにまた、手紙を読んだトールボットがその後どのように変わっていくのかを観察しつつ、貴族某の選んだ、すなわち私たちの選んだ前途有為の若者に対する人間的評価をしていく。このような工夫によって、私たち読者をトールボットの航海に深く参入させるという語りの構造になっている。

第九章『この世の果てまで』はゴールドディングの晩年の作品『通過儀礼』、『接近戦』、『この世の火』が後に合本され、出版されたものであるが、この海洋三部作は主人公トールボットの人間的成長をめぐる物語であるといってもよいだろう。確かに主人公トールボットは人間的成長を遂げる。それは彼の人物評価の変化に、言葉に対する意識の深化にその一端をうかがうことができる。

しかし、この三部作をトールボットの一種の「教養小説」としてすませられないものがある。つまり、そのようなジャンルに納まりきれない、多重的な作品であるということである。この論考では、ハッピーエンドで終わってしかるべき作品が、なぜ「物悲しい」結末になっているのかを、三部作におけるトールボットと他の登場人物との関わりを通して考察している。

結論として、悪の描写の推移と各作品の終結部を関連付けて考えることによって、ゴールドディングの作品がいわゆる「教養小説」とは似て非なるものである所以を述べる。とりわけ、gimmickyと呼ばれた終結部のパースペクティブ転換の技法が各作品に及ぼす影響を検討し、それらの推移をたどることによって、作品の奥行きが増していることを論じた。さらに、作家自身の内面に潜在した合理的精神と倫理性ないしはロマン的精神との葛藤がその作品においてどのような結果を招来したのかを考察した。